

第八回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

井上 義夫 著『評伝D・H・ロレンス』全三巻

(Ⅰ 薄明のロレンス 1992年9月20日 Ⅱ 新しき天と地 1993年10月10日

Ⅲ 地霊の旅 1994年10月10日 小沢書店 刊)

井上 義夫 いのうえ よしお 昭和21年(1946)生まれ。徳島県出身。専攻は、20世紀イギリス文学。一橋大学経済学部卒業。同大学大学院社会学研究科博士課程退学。一橋大学法学部教授(受賞時)。現在、一橋大学大学院言語社会研究科教授。著作は、『ロレンス—存在の闇』、『村上春樹と日本の「記憶」』、共訳書にL・ランガー『ホロコーストの文学』がある。

受賞のことば

数ヶ月前に必要なあつて『風土』を再読し、豊かな文学的感性に圧倒されたところでした。瑞々しい印象が直観を生み、広い学識に動きを与へて理論を形成し、最後に思想の高みに届くといふ氏の研究方法と態度は、日頃から私が範と仰いでいたものです。荣誉ある賞を授けられたことに感謝致します。

《選考委員評》

『地霊の旅』讃

司馬 遼太郎

どの候補作品も、本を読む欲求を十分に満たしてくれた。ただ偶然のかたよりだが、ことしの場合、専門家が専門家に読ませるための—あるいは読み手に専門家を意識した—一本が多かった。

井上義夫氏の『評伝D・H・ロレンス』三巻についての最初の印象もそうだった。「和辻哲郎文化賞」のこの部門は、読み手としてだれでも参加できる—つまり叙述の展開に普遍性の高い—書物を対象としたものとされてきた。だから、これは対象外と思い、むしろ気を楽しみにして読んだ。第三巻から読んだ。浩瀚なものだから、事務局のほうで、第三巻の『地霊の旅』のみを候補作品としたのである。しかし読むにつれ、第一巻も、第二巻も読んでしまった。

私は若いころ、D・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』を、風俗的に読んだきらいがあった。

が、この『評伝』によって見た作品の景観は、まったくべつのものであった。森も猟番も地霊としてとらえていて、貴族夫人に象徴される衰弱した文明が、地霊のなかでその魂を回復する。そういう思想のダイナミズムが、主題という以上に主役になっていることを知った。

私自身の場合、四十年ちかい歳月をへて、一人の作家とその思想を、あらためて教えられするという、やや劇的な結果になった。

赤丸の作品

陳 舜臣

全三巻にわたる井上義夫氏の、評伝D・H・ロレンス『地霊の旅』はボリュームもあり、一見とつきにくいかんじであったが、読んで行くうちに、人の心をとらえて、それをひきはがすのが困難であった。

候補作としては、規定によって、期間の制限があり、一応「Ⅲ」だけとなっていた。しかし、「Ⅲ」を読んでいる最中に、これは「Ⅰ」から読まねばならないという気になり、途中から「Ⅰ」と「Ⅱ」を読み始めた。それほど魅力をもたせた作品である。これを力作と評するのは、作者にたいして礼を失するような気がする。私はこの作品は、ボリュームには目をとじて、評価してほしいと思う。その意味で、私はあえて「力作」という言葉は使いたくない。

読んでいるうちに、井上氏の地の文と、ロレンスからの引用文、あるいはフリーダなど関係者の文章や談話が混じって当惑することもあったが、しばらくするうちになれてきた。それほどこの内容が圧倒的だったのである。

すべては『チャタレー夫人の恋人』に集約されて行くようである。その長い旅（あるいは短い旅とかんじる読者がいるかもしれないが）のあいだ、読者はロレンスの息吹きを、頼にかんじる。払えども払えども、まつわりつく息吹きで、おそらくロレンスはそれを今世紀の問題と思っていたのであろう。それが今世紀がすんでも、なお終わらない問題でありつづける。ロレンスの死後におこったフォスターとT・S・エリオットの論争のたぐいは、これからもつづくであろう。井上氏の『地霊の旅』も、長い論争のリストのなかで、読書人が赤鉛筆で、何重かの丸をつける作品となるにちがいない。

和辻哲郎文化賞が、この作品に与えられたことを喜びたい。

梅原 猛

今回の和辻賞ほど簡単に決まったものはなかった。もちろん他に有力な候補作がなかったことにもよるが、井上義夫氏の評伝『D・H・ロレンス』の三冊本は量質ともに他の候補作を圧倒していたからである。

この本は、実に執拗にD・H・ロレンスという人間を追究する。D・H・ロレンスについて、私は伊藤整氏の翻訳や紹介で知っているにすぎないが、この著者は、多少偏執狂的な性格のある伊藤整氏より数倍も偏執狂的にロレンスに肉薄する。彼がどのように生まれ、どのような人と交わり、どのような思想を抱き、どのような本を書き、どのようにして死んだか。ロレンスの人生の諸段階について、氏は少しも追究の手を緩めない。そして彼と出会った一人一人の人間についても、井上氏は一人ずつその人生の経歴を調べて、その人がどんな人かを詳述する。

この著書は、昨年受賞した堀田善衛氏のモンテニユについての著書と同じように、日本人によって書かれた西洋の作家についてのもっとも詳細で、学問的に質の高い研究書であると思うが、特にラッセルやケインズとの関係のところがおもしろかった。マルクスと並んで日本の経済学者にもっとも高く評価された経済学者ケインズが、ロレンスによってひと目でホモセクシュアルと見抜かれて、嫌悪され、その洞察力をラッセルに賞賛された点などおもしろい。しかもいったん甚だ親密な関係を結んだかにみえるラッセルとも仲が悪くなり、晩年、ラッセルがロレンスをファシストとくちをきわめて罵っている話などまことにおもしろい。

また、この著者がロレンスの晩年をケルト文化復帰への地霊の旅と論じているのは、甚だ興味深い。そのようにみれば、ロレンスの好色小説とも思われる『チャタレー夫人の恋人』も文明論的な書として読むことができるわけであるが、ここ数年来、森の文化ということを考えていた私には、この点においても甚だ多くの示唆を受けた。